

白血病について

血液内科で診療を行う主な疾患に「造血器腫瘍」があります。このなかでも「白血病」は報道やドラマなどで取り上げられるため、ご存じの方も多いかと思えます。

血液の中には、体内に侵入した細菌やウイルスなどを排除する、いわゆる免疫を担当する白血球・リンパ球、肺から取り入れた酸素を全身の細胞に運ぶ赤血球、出血した場合に止血する血小板・凝固因子などがあります。そして白血球などになる若い細胞（芽球といいますが、腫瘍として増殖するのが「急性白血病」です）。

増殖した腫瘍細胞が正常な血球が作られるのを邪魔して、正常な白血球・リン



市立函館病院

血液内科

伊東 慎市 科長

略歴

平成18年、北海道大学医学部卒業後、市立釧路総合病院、北海道大学病院、市立函館病院、東京大学医科学研究所などで勤務。平成26年より、市立函館病院で勤務し、令和2年9月、科長に就任。日本血液学会血液専門医。

パ球が少なくなれば感染症になりますし、赤血球が少なくなれば貧血症状が、血小板が少なくなればあざ（紫斑）や出血症状が出てきます。腫瘍の増殖の速度が早い場合、多くの場合直ちに治療を開始する必要があります。急性白血病には「急性骨髄性白血病」と「急性リンパ性白血病」があり、初期症状は似ているのですが、腫瘍になる細胞の種類が異なるため、治療も異なります。

一方、「慢性骨髄性白血病」という疾患があります。これは芽球ではなく、血球を作る根幹の細胞である「造血幹細胞」に特定の遺伝子の異常が生じ、「正常な血球が増えすぎる」疾患です。自覚症状

が無いことが多く、健康診断や職場の検診などで偶然発見されることも多いです。現在では症状のない時点であれば内服薬での治療が可能です。治療せず経過すると急性白血病に変化し、非常に予後の不良な疾患となります。『慢性』だからといって、様子を見て良い疾患では決してありません。

ただ、白血球が増加・減少するのがすべて「造血器腫瘍」という訳ではありません。感染症や自己免疫性疾患、あるいは薬剤の有害事象でも白血球数は増減します。まずはかかりつけ医にご相談の上、血液内科へ紹介していただくのがよろしいかと思えます。